対象となる功績内容

- 精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- 海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
- 家庭で実子に限らず多くの子どもを養育されている功績
- その他の功績

一般社団法人 愛媛県摂食障害支援機構

代　表
鈴木こころ

愛媛県

代表の鈴木こころさん自身が摂食障害を患い、28歳まで引きこもっていた経験を持ち、居場所や仲間が欲しいと自助グループ、「リボンの会」を18年前に結成。参加者の仲間と繋がっていたいという思いは、外出の機会を作ることになり、徐々に社会への繋がりを取り戻していった。摂食障害は過食や拒食など食べることに問題が現れる、実は死亡率の高い疾患の一種にも拘らず、回復への環境がまだ整っていない。周囲の理解が乏しいことや社会全体での取り組みが少ないことが当事者を孤立させることとなり、昨今では低年齢化が進み、社会問題化している。そこで、2018年に摂食障害の理解を進める「マゼンタリボン運動」を開始。社会全体にくまなく理解され、必要な支援の輪が広がるよう、シンボルマークであるマゼンタリボンを全国に展開している。その一環として、摂食障害についてのパンフレットやポスターを自費で作成し、愛媛県内すべての学校や自治体等にのべ10万枚近くを配布。全国のモデルケースになればと活動している。同時に講演やカウンセリング等も行い、早期対応、回復支援に取り組んでいる。

（推薦者：高山　良二）

この度は、たいへん栄誉ある社会貢献者表彰を賜りまして、誠にありがとうございます。

私たちの活動は、2004年、地方都市の公共施設にある小さな会議室から始まりました。

それは、当事者のための自助グループ「リボンの会」といいます。右も左もわからない中、手探りで動き回る日々を過ごす中で、これまで多くの仲間や支援者の方たちと出会うことができました。

今回の受賞は、そこで出会った方々の一つひとつの小さな思いが、さざれ石のように数多く積み重なってひとつの大きな形になったものと考えております。

私たちが取り組む「摂食障害」は、現時点では治療法が確立されていない疾患です。精神的な苦痛やトラウマが、「拒食症」「過食症」など「食べる」という行為に現れ、身体も心もむしばんでいく、（医学的には）病気なのですが、報道やインターネットなどではセンセーショナルに取り扱われることもあり、奇異の目で見られがちです。それゆえ当事者や家族は、摂食障害であることを隠そうとしてしまい、周囲に助けを求めることが難しい傾向にあります。

私たちはこれまでに、毎月開催の当事者向けの自助グループを中心に、カウンセリング、回復に向けた就労支援の場の提供、勉強会や講演、調査研究などに取り組んで参りました。

しかし、近年では、摂食障害者の増加が著しく、当事者が置かれる環境も、私たちが活動を始めた頃とは大きく変わってきています。

そこで私たちは、地域社会に理解を広げ、社会全体の多方面から支え手になっても

らうことを目的として「マゼンタリボン運動」という啓発活動も行っています。

このマゼンタリボン運動は、今年で４年目になります。マゼンタ色のリボンをシンボルとして、全国各地の当事者や経験者などが、支部やサポーターとして活動に参加してくださっています。今回、表彰を賜ることで「自分たちの活動は、社会からきちんと評価されている！胸を張って活動を行える！」という強い勇気を持つことにつながりました。本当にありがとうございます。

今後も摂食障害の理解促進を各地で進め、多様な人々が摂食障害にあたたかなまなざしを持つ社会づくりを目指します。そして、SOS を発することが難しい方たちが、住んでいる地域でよりよいケアを受けられるような社会になることを願っています。

▲マゼンタリボンは刺繍糸を編む作業からすべて手作業。ひとつ作るのに３時間かかる

▲愛媛県内の自治体、学校には、このように掲示してもらっています

▲自助グループ「リボンの会」のメンバーらと市民活動発表会に参加した時の様子

▲市民を集めて摂食障害の勉強会をした時の様子

▲いつもはこんな感じで仕事をしています

▲愛媛県教育委員会を通じて、県内すべての小中高学校に、摂食障害の理解促進のためのポスター、リーフレットを寄贈

公益社団法人 ア・ドリーム ア・デイ IN TOKYO

理事長
天野　功二

東京都

日本では約12万人の子どもたちが完治することのない難病と闘い、疾病や障がいと共に懸命に生きている。日常的に医療的ケアが必要な子どもも多く、旅行はもとより外出もままならず、家族は24時間365日ケアを担わなければならない。病児のきょうだいは子どもらしく親に甘えたり我儘を言ったりすることもできず我慢が当たり前となり、ヤングケアラーとなってしまうこともある。このような状況を案じていた国立成育医療研究センター院長・故佐伯守洋氏が中心となり、難病の子どもとその家族を東京エリアに無償で招待し、家族旅行の素敵な想い出をつくるお手伝いをする活動を、2007年より行っている。対象となる病児は、難病により人工呼吸器やその他の医療的ケアが必要で、医療専門家によるサポートがないと旅行が難しく、受入れ前には病児の主治医と同法人の小児科医チームが旅行の可否を判断し、綿密に医療支援計画を立てる。旅行は病児や家族の希望に沿って計画され、移動には小児科医や救急救命士が同行、安全面に十分配慮をしている。東京エリアへの初めての家族旅行は、病児にとってもきょうだいにとっても、楽しい経験・素敵な想い出となり、生きる希望につながる。年間10組ほどの家族を招待し、これまでに約100名の病児を支援してきた。

（推薦者：前川　篤）

この度は、大変栄誉のある賞を頂き、関係者一同、大変嬉しく存じます。誠にありがとうございました。また、当法人の活動を応援してくださっている支援者の皆様、ボランティアとして活動に加わってくださいました皆様に、心から感謝申し上げます。

公益社団法人 ア・ドリーム ア・デイ IN TOKYO は、国立成育医療研究センター病院長（設立当時）を務めておりました佐伯守洋を中心に、小児医療に携わる者とその支援者が集まり設立した団体で、医療の限界を認識しつつ、医療や行政には出来ない、ご家族に寄り添った支援を行うことを目指し、難病と闘いながら懸命に生きている、もしくは難病により生命に限りがある子どもの夢を叶えるために、難病児とそのご家族を東京への家族旅行にご招待する支援活動をして参りました。これまでの15年間で、約100名の難病児とそのご家族約450名をご招待し、たくさんの笑顔と素敵な想い出を作るお手伝いをいたしました。

当法人の活動の背景には、日本の医療の光と影があります。医学の飛躍的な進歩に加え、日本の新生児科医の弛まぬ努力により、新生児死亡率（出生1000人当たりの、生後28日に到達する前に亡くなる新生児の数）は0.9人と、世界で最も新生児が亡くならない国となりました。また、小児科医の尽力により、以前は幼少期に亡くなっていた難病の子どもたちが長期にわたり生存できるようにもなりました。他方、このことは、難病と闘いながら、もしくは重い障がいを持ちつつ生活していく子どもを増やしたという面も持ち合わせています。我が国では、難病を持つ子どもたちを支援する国の施策として、小児慢性特定疾病対策（対象病児は年間約12万人）や医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律（対象者は年間約２万人）による支援等が実施されています。これらの施策により、医療費助成に加え、福祉や教育面での支援も

様々展開されるようになりました。しかし、それでも、難病児を育てていくにはご家族の負担は計り知れず、例えば人工呼吸器を使用している児には１、２時間おきの吸引が必要で、親はまとまった睡眠時間を確保することも出来ません。病児のきょうだいも、親が病児から目が離せないため、親の関心や愛情が向けられていないと感じたり、また親に代わって病児のケアを担うことでヤングケアラーとなってしまい、子どもらしく過ごすことが出来ない場合もあります。

当法人でご提供する家族旅行では、難病児の夢を叶え、日常とは異なる新しい世界にふみ出すお手伝いをするだけでなく、ふだん我慢の多いきょうだいたちには、思い切り楽しむ機会を提供し、またママやパパを独り占めする時間を作るお手伝いをします。看護・介護に追われていた親御さんには息を抜いて頂くレスパイトタイムをご用意します。

今回の受賞と子どもたちの笑顔を励みに、これからも一人でも多くの難病児とそのご家族をご支援出来るよう、努めて参りたいと存じます。ありがとうございました。

▲夢の国に到着

▲ドライバーさんありがとう

▲お姫様のおめかし　夢の国でシンデレラに変身

▲作戦会議　次のアトラクションを相談中

▲ボランティアさんともすっかり仲良しになりました

▲思いっきり遊びました　みんな完全燃焼です！

佐伯　昭夫

NPO 法人シャンティ山口
事務局長

山口県

タイ北部の山岳少数民族の自立支援に約30年間、無給のボランティアとして活動。元々は山口県の技術系の職員を務める傍ら、仲間と共に定期的にボランティアセミナーを開催。そこで国際難民キャンプで活動していた曹洞宗の僧侶を講師に招き、話を聞いたのをきっかけに「シャンティ山口」の前身「曹洞宗ボランティア会山口県支部」に入会。阪神淡路大震災の被災地緊急援助や、タイ北部の山岳少数民族の住む村落の支援も行った。住民の自立促進が目的のため、地域の生活環境を整備し、行事など、住民と共に協働連携することを前提に活動を続けている。先ずは、住民から意見を聞き、どうしたらいいのかを共に考え、地域にあるものを使い、一緒に作り上げていく。2005年からトイレの普及を進め、排泄物を活用し残余物を畑に戻す自然循環型のエコトイレシステムを開発し設置した。他の村では強い農薬を使用する遺伝子組み換えトウモロコシ栽培で畑の荒廃が進んでいたため、果樹やコーヒー豆など低農薬の作物に転換させ環境を改善。お金や物を渡すだけの支援ではなく、現地の住民に寄り添い、環境を考えた支援を続けている。

（推薦者：岩本　功）

社会貢献者表彰をいただきありがとうございます。

30歳後半のころから気の向くまま関わったボランティア⁉、気がつけば、すでに40年が過ぎて後期高齢者となりました。“元気がとりえ”のキャッチコピー、体の動く限り私の旅は続きます。

1981年国際障害者年をきっかけに障がい者ボランティアのお手伝いから始まり、阪神淡路大震災を経て国内活動の傍ら、ベトナム戦争・ラオス内戦で難民となり、タイ国境沿いの山岳地に逃れ貧困とハンディーを背負って暮らしているモン族の各村の自立支援に至り、子どもの教育、保健衛生、持続可能な農業など寝食を共にしながら生活全般にわたってのお手伝いをしています。2007年地球環境基金助成事業での挨拶の一部をご紹介します。

私がこの村に最初に来たのは10年前、一人の小学校６年生の女の子（スパトラちゃん）のシャンティ寮入寮の家庭訪問でした。村の家は、竹と茅葺き造りで、木々が生い茂り、緑豊かで自然と共に伝統を継承しながら暮らしていることでした。

今回村に来てびっくりしました‼、以前の自然豊かな村の木々は全く無く、一面「遺伝子組み換えトウモロコシ畑」になっていました。農薬による体の不調や飲み水が無くなり、洪水による被害、土地は痩せ作物ができなくなり、多くの弊害と村の危機が迫っていることを知りました。このまま「トウモロコシ栽培」を続けたら、ここに住めなくなり、村も無くなることもみなさんもよく知っていましたが、なすすべもなく、現金収入唯一の「トウモロコシ栽培」に明け暮れ、次々と森林伐採を続けていました。

私は、これは大変なことになると思い、日本の皆さんにお願いしてこの村のお手伝いをすることになりました。村の将来について、みんなで話し合いを何度も繰り返し

「トウモロコシ」を止めて果物の木を植えることを決めました。保育園舎の建増し、給食の煮炊きのメタンガスを利用したエコトイレ、これまで無かった各家のトイレをみんなで作りました。農業センターを造り、果物のつくり方や、増やす方法も勉強しました。また、政府などの農業研修所にも行き学びました。保健衛生や健康管理のセミナーでは、これまで知らなかった事を沢山勉強し、みんなで助け合いながら続けてきました。これからは、学習したことを生かした暮らしと、果物の収穫ができるまで「あと少し」みんなで頑張りましょう。今日は、みんなで創りあげたプロジェクトのお祝いと、来年もプロジェクトが続きますよう、そして新しい行政の村になるよう、皆さんでお願いしましょう。　“日本のみなさんありがとう”

　これからもハンディーを持った村の「子どもたちの夢や希望が抱けるように」私の旅は続きます。

▲またまた保育園と村の６番目の共同トイレができました

▲みんなで協働（水道配管作業）

▲村に通じる唯一の道路（雨期になると陸の孤島となり緊急事態に……）

▲気がつけば村の長老の仲間入り（村民全員から祝福）

▲苗木から10年目、初めての収穫（ジャックフルーツ）

▲農村開発プロジェクトの一段落（泥落としパーティー）

NGO ベトナムの子ども達を支援する会

会　長
関谷　滋

京都府

支援学級の教師をしていた板東あけみさんは、39歳の時ベトナムベンチェ省を訪問した。現地では枯葉剤に加えてワクチンや医療従事者の知識・技術や医療機材の不足などの厳しい環境によって、多くの障がい児が存在していた。その現状に突き動かされ1990年に同会を設立。障がい児学校や病院の建設、村診療所の医療機材改善、専門家研修などを実施した。障がいの予防・早期発見・早期介入を考える時、妊産婦の管理は大変重要と考え、日本発祥の母子手帳の使用を行政に提案した。1998年から省の全面的な承認と各機関への指導を得て本格的な母子手帳がベンチェ省で使われ始めた。この取り組みはベトナム保健省の大きな関心を呼び、2020年には保健省からベトナムで唯一の家庭保管の母子保健記録と認定されて、ついに全国展開に至った。貴重なボトムアップの実例である。その後早期介入のための早期支援センターの設立に協力し、ベンチェ省で今では２、３歳くらいから地域の保育園と並行通園しながら訓練を受けている母子が多くいる。また地域の小学校にパイロット支援学級を設置。重度の在宅障がい児や成人へ支援を行うための地域健康管理員用の資料や研修などを継続的に行っている。これらは、明確に自立に向けた支援活動であり、行政との協働による理想的な国際協力である。

（推薦者：井口　加代子）

「子ども達を大切にする行政・地域とともに歩んだ32年の軌跡」

1990年に初訪問したベトナム南部ベンチェ省には、30余年にわたるベトナム戦争の影響が色濃く残り、電気が通っていない、病院には医療機材も技術もない、ワクチンもない、治療も十分に受けられない、小学校すら十分にないなど、まるでタイムマシンに乗ったかのような錯覚すら感じました。半面ベンチェ省の行政幹部が、資金のない中自分たちの給与から寄付を集めて、障がいのある子ども達の学校の建設計画をつくり始めておいでになったことに深い感銘を受けました。この２つの出来事から、当会を1990年に設立し、この30年あまりに医療・教育・福祉・地域の軸と、障がいの予防・早期発見・早期介入・社会参加の軸を重ねて、交流ツアーを行ってきました。医師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・看護師・保健師・発達検査専門家・特別支援教育の教師などの専門家に加えて、障がいのある方々やご家族の参加もありました。そしてこの間に教員研修と併せて障がい児学校が建設されて、早期支援センターができ、近隣の保育園と並行通園できる子ども達が急増しました。

新生児管理やリハビリなどの医療技術協力も実を結び、併せて提案した母子健康手帳は、ベンチェ省の成果を政府に評価されて、貴重なボトムアップとなり今やベトナム全地域で使用されています。ベンチェ省の村のほとんどの集落には、地域健康管理員が配置され､在宅の障がいの重い人たちへの情報提供や相談活動もなされています。数年前からベンチェ省ではすべての子ども達の予防接種履歴がコンピュータで管理されております。お母さんと赤ちゃんが出産で入院している病院でポリオのワクチン投

与を受けたということが、住民の健康を護る最前線の村診療所のコンピュータで確認できるそうです。

これらのベンチェ省の変化を30余年ずっと見続けてきて、私たちは援助する側される側という関係ではなく、ともに学びともに実践する中で共有できることがたくさんあるということを学びました。子ども達を護るためには医療と教育と福祉と地域社会が一丸となって連携する。私たちはベンチェ省の人たちと交流するたびに、この基本的なことをいつも胸に刻み、日本でも活かせることは活かしたいと思っています。早く、新型コロナが落ち着いてまた前のようにベンチェ省にいける日が来ることを楽しみにしています。

▲2冊目の母子手帳

▲おいしい食事の時間

▲病院リハビリ科の職員講習会

▲発達についての講習会

▲省立病院集中治療室

▲障害児学校設立25周年早期支援センター開設記念式典

更生保護法人 しらふじ

理事長
大野　美雄

島根県

明治44年から続く、島根県唯一の更生保護施設で、これまで数多くの刑務所出所者等の自立支援を行っている。施設敷地内でバザーやミニコンサートの開催、地域の子どものクリスマス会、災害時の一時避難所や防災訓練の場所として提供するなど、日頃から地域住民とのコミュニケーションを図り、理解促進に努めている。特にコロナ禍では、新たな入所者の受入れをためらう施設もある中、感染予防対策を徹底して積極的な受け入れを行い、元受刑者の社会復帰を後押ししたことで、地域の人々からも評価され、マスクや消毒液の支援を受けるなど、地域に根付いた存在となっている。また、満期釈放者の再犯率が高い背景には、釈放後の住居が定まらないことが主な原因であることを鑑み、地元松江保護観察所や松江刑務所と連携し、仮釈放者のみならず満期釈放者の受入れにも積極的に取り組んでいる。更に、自立し退会した人を継続支援する「フォローアップ事業」にも取組み、行政手続きや地域医療の紹介、大家さんとのトラブル調整、食料品や衣類の支援なども行っている。また、全国的にも例が少ない、ギャンブル依存症の課題を抱える被収容者に対する取組みも実施するなど、多方面から自立を支えている。

（推薦者：中本　忠子）

この度は素晴らしい賞をいただき、衷心より感謝申し上げます。安倍昭恵会長から直々に表彰状を頂戴し、すべてにおいて洗練された一連の行事に感激いたしました。また、選考委員の皆さま、ご推薦の労を賜りました中本忠子さまに感謝申し上げます。

受賞された他の皆さまの素晴らしいご活動を見聞するにつけ、様々な分野で頑張っておられるお姿にも深い感銘を受けました。そして、笹川陽平日本財団会長のご挨拶の中で「多様化の中で忘れられがちなことに光を当てる」とのお言葉に、社会貢献者表彰の真意を知りました。

私たち更生保護施設は、主に刑務所等の矯正施設を出所したのち、利用を希望する人たちに一定期間の衣食住を提供し、様々な改善プログラムを通じて更生に導き、就労支援をして勤労の尊さに目覚めさせ、自立を促しています。

しかしながら、人ひとりを更生に導くことは決して容易なことではありません。とりわけ、しらふじのような更生保護施設を帰住先とする人には、その処遇に困難が伴うこともしばしばです。更生に向かって手を差し伸べる多くの人々の善意も虚しく、再び罪を犯してしまう人がいるのもまた現実です。

それでも「生まれながらの悪人はいない、人はいつかは必ず変わることが出来る」と信じて、更生保護関係者や地域住民の方々のご理解ご協力をいただきながら、施設長以下８人の職員がまことに士気高く職務に精励しています。

今回の受賞は、普段知られることの少ない私たちの活動にとって、大変大きな励みとなりました。更生保護施策の最後の砦としての矜恃を保ち、引き続き安心安全な社会構築の一翼を担うべく負託に応えていく所存です。諸大徳の尚一層のご指導ご鞭撻

をお願い申し上げます。本当に有難うございました。

▲コラージュ作成会

▲バザー

▲地域の子どもたちのためのクリスマス会

▲法話の集い

▲無料健康診断

▲町内会さんと防火訓練

BLT 子ども食堂

代　表
一條　りか

福島県

“家族団らん”をテーマに毎月１回お弁当の無料配布と同時に「わらしべ長者」物々交換会を実施。困窮家庭のみを対象とせず、誰でも参加でき、子どもも大人も含めた家族全員分を提供している。福島市内の220世帯が会員登録しており、毎回400～600人以上が利用、並ばずに希望の時間帯に受け取ることができる。食料配布や物々交換の準備は有志のボランティアが仮装して行い、時には、協賛の屋台やお菓子等のプレゼント配布もある。創設者の吉成洋拍さんは「長蛇の列に並び施しを受けるような形だと、周りの目が気になり本当に受け取って欲しい人に届けられない」と、だれもが気軽に参加できるお祭りのように開催している。BLT カフェを拠点とし、「お互いさまチケット」（ペイフォワード）で無料のハンバーガーセットや「みんなの食糧庫」（フードドライブ）を設置するなど繋がりのある社会を目指している。吉成さんは「善意の循環」を掲げ活動していたが、夢半ば2021年５月に他界。恩送りの想いは仲間に受け継がれ、全国の10箇所でペイフォワード制度が導入され、「みんなの食糧庫」は福島県内では２箇所、全国では20箇所で取り組みが始まっている。吉成さんの恩送りの想いは100箇所を目指し、地域社会へと広がっている。

（推薦者：NPO 法人 チームふくしま／株式会社 クラロン／村田純子）

この度は、栄えある社会貢献者表彰を受賞させていただき、誠にありがとうございます。

財団の皆様、ご推薦、ご尽力くださいました皆様、ご寄付協賛してくださる皆様、そしていつも活動を支えてくださるボランティアの皆様に心から御礼申し上げます。

BLT 子ども食堂の活動テーマは「家族団らん」です。子どもだけではなく、『昔、子どもだった方』つまり大人も対象です。子ども食堂の日だけは家族みんなで同じものを一緒に食べる。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん家族みんなで一緒に食卓を囲み『家族団らんのひと時』を過ごしてほしい、そんな想いが込められています。

子ども食堂で食事を配布した後、あるお母さんから Mail をいただきました。

「毎日、仕事と家事と子育てととても大変です。イライラしてしまい子どもたちに大きな声を出してしまったこともありました。疲れているからとはいえ、自己嫌悪に陥ってしまいます。子ども食堂の日、食事の支度をしなくていいということだけで私の気持ちは驚くほど軽くなり、久しぶりに家族みんなで食卓を囲みました。みんなで食べる食事は、本当においしかったです。」

Mail を読んで、『私たちがはじめた子ども食堂は、間違っていなかったね』と温かい気持ちになりました。

子育て世代が苦しんでいるのは経済的困窮だけではない。保護者が抱えるストレスを少しでも緩和できる存在になれたこと、保護者の笑顔が子どもたちの笑顔につながること、多くのことを学ばせていただいた Mail でした。

BLT 子ども食堂は、吉成洋拍が創造した『お互い様の街ふくしま』活動のひとつ

です。

ほかに、次のお客様の分の食事代を支払う「ペイフォワード」制度、自分たちでは食べきれない食材等を、必要としている方に提供する「みんなの食糧庫」

この３本の柱から「お互い様の街ふくしま」は成り立っています。

東日本大震災を経験し、原発事故の避難者が過ごす体育館で長期にわたり炊き出しボランティアをし、「福島復興」のためにNPO法人理事としても活動を続けてきた吉成。そんな彼が『発想』し、築き上げた活動を、こうして認めていただけたこと、本当に感謝いたします。

吉成洋拍は2021年、志半ばで急逝いたしました。これからも彼が遺した『お互い様の街ふくしま』の精神を紡いでゆきたいです。そして今、各方面に撒いていった小さな種が芽吹き始めています。そのすべてを具現化することはできないかもしれませんが、支えてくれる支援者、ボランティアさんの力を借りながら私なりに『想い』を育み、繋いでいきたいと思っています。ありがとうございました。

▲ボランティアスタッフの記念撮影

▲スタッフ集合写真

▲使わなくなったおもちゃや衣類が次の人へ

▲幼稚園児の仮装をしてボランティアスタッフに子どもたちへの想いを話す吉成洋拍

▲配布するお弁当の準備をするスタッフ

▲大きい鍋でカレーの具材を炒めている様子

▲配布するお弁当を作っている様子

▲利用者さんへその場でわたあめを作っている様子

NPO 法人 さくらねうねう

理事長
藤好　建史

熊本県

「さくら」は避妊去勢手術をした猫の耳の印が桜の花びらに似て桜耳といわれることに由来し、「ねうねう」は、源氏物語に出てくる猫の鳴き声の表現。猫の TNR（保護し、不妊去勢手術後に元の場所に戻す）活動を行う団体として、2010年から活動を始め、2018年に NPO 法人となった。理事長の藤好建史医師は、自身が開業するクリニック周辺に当時、外猫が多く、交通事故や病気、殺処分、毒餌等の被害に遭う猫たちの悲惨な状況を目の当たりにし、保護活動を開始した。熊本地震後に野猫が増えたことから、人口9,500人の村では１年に300頭以上の不妊去勢手術を実施した。独居老人が増える中、安心して餌やりができる地域猫の存在は、高齢者の和みにもなっている。また、藤好医師は南阿蘇に家を購入し、保護猫の専用シェルターを構えたほか、道の駅の食堂には、猫への理解を深めたり、高齢者のサロンにもなるような猫の相談所を作った。同団体の活動に多くの地元有識者が賛同・参加しており、行政や地域の理解が得やすい環境の下、組織的に機能し、活動が円滑に行われている。TNR を通じて「野良猫」から「愛され猫」へ、地域猫として安全に健康に、住民とともに生きることを活動の目的としている。

（推薦者：学校法人 昭德学園九州動物学院　学院長　徳田　昭彦）

本日はこのような、日本の NPO の憧れの賞を頂けることになり、野良猫の TNR 活動にかかわってきたボランティア達の苦労が報われたこと、皆に代わってお礼を申しあげます。ありがとうございました。

我々の日常業務の医学の世界はまるで音をたてる程の勢いで変化しており、人という生物の本質に迫りつつあります。これに伴ってほんの10年前まで常識だと思われていたことが実は間違いであることも出てきました。もっとも新しい発見は人と動物の体内の菌が行き来することが発見されたことにあります。

即ち、人が人になったのは16000年前、人が犬と生活するようになり、犬の持つ細菌が人の腸内に入り込み人がまったく消化出来なかった食物からエネルギーを手に入れることが出来るようになり、食物探しの為の時間が短くなり、生活の中に時間の余裕が生まれ、これが農業を開始するきっかけとなったと言われています。

更に、農業によって食物を貯蔵するようになったため、ねずみから食物を守ってくれる猫と共存するようになり、今度は猫の共生菌が人の腸内共生菌に加えられ、更に時間の余裕が生まれ、文明という人、特有の世界を作り出したのが8500年前と言われています。

加えてこの頃から家畜として多くの種類の動物と共存することとなり、人の腸内細菌はますます複雑になっていきます。

人は哺乳類の中で、頭抜けてなんでも消化でき、エネルギーに変えることの出来る腸内細菌を持つようになり、人は科学文明を手に入れました。

所が、効率化が進められていく中で画一的な肥料を保った農業や画一的な飼料による酪農がこの100年急速に進むにつれ、我々の食の画一化、単純化が進み、これによって動物との共存の中で手に入れた複雑な腸内細菌は少しづつ単純化し始め、人々の免疫機構はゆっくり、破綻し始めたと言われています。

特に1970年頃から人の都市への集中が進み、動物との直接の触れ合いが減少した結果、人の腸内細菌は急速に数を減らし、癌や糖尿病、免疫病の原因を作りだしてしまったと言われています。

私たちの NPO は元熊本市長を中心に世安会議という名前の会を２ヵ月に１回開催しており、その目的は「熊本の人と動物たちのしあわせな未来づくり会議」としています。

人がより多くの動物と共存し、食の複雑さを自然農法によってとり戻すことで、我々熊本人の精神と肉体の健康を全国に先駆けて取り戻すための会議で、地元デパートや日航

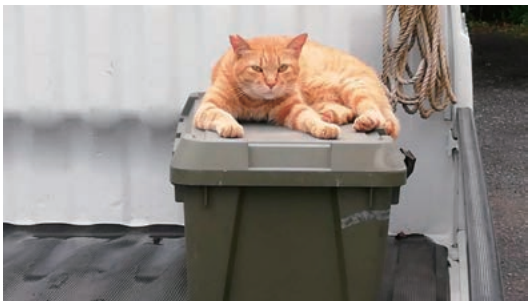
ホテル、日産自動車等、熊本を代表する方々の協力を得て動きだしています。
　10年後、安倍昭恵さんに我々熊本の人と動物たちの驚く程の健康でしあわせな世界をお見せ出来るよう頑張ります。
　ありがとうございました。

理事長　藤好　建史

　2010年頃、熊本市の大水害のあとから、野良猫が各地に多数発生する事態がおこり、特に熊本市はお城を中心に大きなお寺を配した町作りになっており高い塀と木々の中にあり、猫にとってはとても住みやすい所ですが、お寺に出入りする人々が猫に餌を与える為、次々と猫が増え、子猫の事故やカラスに食べられるという事態がおこり始め、お寺のわきでクリニックを開業しておられた藤好医師が猫の保護を開始されました。
　保護した子猫はみるみる増え、クリニックの2F の部屋に23頭となり、私の竜之介動物病院に相談に来られました。
　私どもも年２回２月と11月に丸１週間を使って猫の無料避妊手術のキャンペーンを行っており、１回の頭数は2,000頭にも及びます。
　しかし、常時は対応出来ていないため、キャンペーンの間を埋める目的で TNR の NPO 立ち上げをおすすめしました。
　藤好医師はこの考えをよく理解され、ただちに熊本の多くの方（日産自動車、商工会、青年会議所、元保健所長等々）に声をかけ、すぐさま NPO を立ち上げ TNR を開始。わずか３年で1,000頭の手術を達成し、捕獲かつ手術、リターンの流れも十分に慣れた人々が行うことでスムーズに推移しています。
　又、パチンコ屋、葬儀屋の協力も取り付け、各店の駐車場で大型トレーラーを使った譲渡会も始まっており、阿蘇では買取った別荘を利用した病気や外傷の猫のためのシェルターも出来上がっています。
　多くの方々を巻き込んで野良猫を地域猫へ、という合言葉で最近では町中にほとんど野良猫を見ることがなくなりました。
　今後も多くの心ある仲間たちと共に熊本の人と動物の幸せな共存の未来も目指して頑張ってもらうことを期待しています。

推薦者　徳田　竜之介

▲野良猫を保護中


▲さくらねこ

▲TNR 活動の紹介 VTR より

▲TNR 活動の紹介 VTR より

更生保護法人 旭川保護会

副理事長
杉本　啓二

北海道

大正11年に旭川地方検察庁検事正等が、出獄者の更生を助けるために設立し、今年で100周年を迎える。19～76歳の入所者の半分は薬物事犯者。他の施設で受け入れを拒否された人たちの最後の砦と言われている。累犯等で刑期が長く、急速に変化した社会環境に戸惑う入所者に、ATMや交通系ICカードの使い方等を教える。更生施設としては珍しく365日３食、温かい食事を提供し、集団での依存症回復プログラムも施設内で実施している。週に一度は、観察官も出席する処遇会議が開催され、入所者それぞれに関する近況報告、情報共有を行い、一人一人に寄り添っている。また不動産会社と連携して、退所者への住居支援も行い、社会生活にとけ込み、孤立しないように、またいつでも相談に、遊びにこられる雰囲気を職員一同が作り、同じ目線で接することを心がけている。卒業生５人が社会福祉施設を運営するという成果をあげている。

（推薦者：更生保護法人 全国更生保護法人連盟）

第58回 社会貢献者表彰を受賞して

此度は、社会貢献者表彰をいただき身に余る光栄で感謝申し上げます。

大正11年に旭川保護会が設立され、今年で満100年になります。そんな記念すべき年に社会貢献者表彰をいただいた事は二重の喜びであります。今回の受賞は我々職員のみならず、創設以来尽力した役職員の努力の賜物だと思っております。

更生保護施設の使命は頼る人がなく、生活環境に恵まれなかったり、社会生活上の問題があるなどの理由ですぐに自立更生出来ない人達を一定期間保護し、円滑な社会復帰を助けて再犯を防止するという役割です。作家の吉村昭さんは当施設を題材にした小説「見えない橋」のなかで「刑務所と社会の間に架けられた橋の上に設けられた休憩場所です」と書いておられます。

今迄に帰る場所も、行く場所も無いたくさんの人達を受け入れ、立ち直りを支え、社会復帰を支援してきました。近年は高齢者、障がい者、薬物事犯者等の処遇が難しい人達を多く受け入れています。特に薬物事犯者等には毎月２回断薬回復プログラムを実施しております。時には夜中まで寮生の話し相手になる事もあります。また、急病の寮生に付き添い救急車で病院に同行したり、精神疾患者の予約が非常に困難な中、無理を言って診てもらったりすることもしばしばです。

また住所が分からず戸籍簿附表を取得してからの確定作業もあります。

満期後、市内で自立する場合にはアパートの確保や生活保護の申請手続に同行しております。

このように毎日寮生のため親身に活動をしています。過去には職員家族が住込み、家族ぐるみで寮生の面倒を看ていた事もあったそうです。諸先輩や役員の方々が、知恵、資金、労力を出し合い、今日まで支えて下さったことに感謝申し上げます。

当施設にはほぼ毎日、退所した元寮生達が来所したりや電話がきます。自立後も不安の中、相談相手、話し相手もおらず、社会で孤立している人がたくさんおります。そういう人を支えるためにも、更生保護施設の存在は重大なものがあります。

今回の受賞式に出席させて貰い、さまざまな方々が世のため、人のためにご活躍されている事を再認識させていただきましたと同時に、改めて受賞の重責を実感した次第であります。最後にご推薦いただきました全国更生保護法人連盟様はじめ、関係諸団体のみなさまに感謝申し上げますと共に、今後もご期待にそえる様、努力精進する事を御誓い申し上げます。

▲旭川清和荘全景

▲社会奉仕活動公園清掃

▲薬物飲酒回復プログラム

▲調理実習

▲近隣町内除雪風景

▲餅つき大会

NPO 法人 札幌微助人倶楽部

北海道

高齢化や核家族化が進み、個人だけでは解決できない事や困り事、要介護者への公的サービスだけでは補えない事に、地域のみんながお互いにささやかに助け合おうと26年前に設立された生活支援有償ボランティア組織。その名の通り、日々のちょっとした困りごとに会員同士で助け合おうと、要請を受けた事務局は“助人（すけっと）”をマッチングする。現在950名を越す会員は、「今は助ける側でも将来は助けられる側にもなる」と依頼者・対応者両方が登録している。依頼の内容は様々で、ワクチン接種や通院の送迎、保育園の送り迎え、庭仕事、本の朗読、そして土地柄多いのが除雪作業。送迎サービスはタクシー料金のほぼ半額で送り迎えしている。有償ボランティアにすることで依頼する側、される側双方の遠慮や気遣いを払拭する。まさに共助の理想的な関係を作るシステムであり、今後、札幌モデルとして全国展開が期待される活動。

（推薦者：筒井　哲雄）

会　長
児玉　芳明

笑顔いっぱいの社会をつくりたい

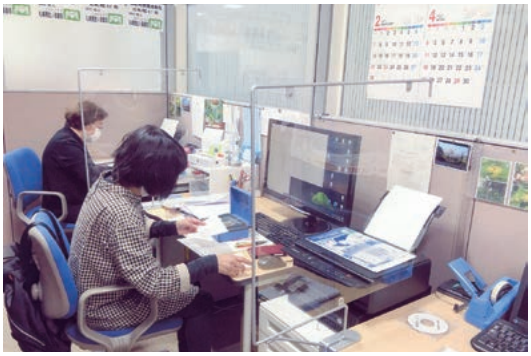
「妻にがんが見つかった時、二人の子どもを抱えて大変な毎日になってしまいました。その時、食事づくりに来てくれたのはびすけっとのＨさん、Ｍさん、Ｉさんでした。どんなに助かったことか」「私は87歳の元教師です。老人性眼底出血で失明して好きな読書が出来なくなりました。しかし今はＹさんに週２回３時間、ボランティアとして朗読に来てもらっています」「足腰が衰えて外出が出来ません。びすけっとの移送サービスのおかげで教会へ行けるようになりました。行き帰りの車中での会話も楽しみです」

「フリーのライターです。コロナ禍で仕事が減りました。時間が出来たのでボランティアに挑戦しようと移送サービス・ドライバーになりました。いつかは自分も助けが必要になるときのことを考えて、これからはパソコンとハンドルの二刀流です」「お年寄り宅のお掃除、食事づくり～あなた、頑張っているねと経験豊富なお姉さまたちに言われながら楽しんでお手伝いをしています」

NPO 法人札幌微助人（びすけっと）倶楽部の活動では、こうして支えられる人も支える人も笑いで会話が広がります。私たちはこうした笑顔を、もっともっと広げていきたいと思っています。介護保険、医療保険などの公的サービスでは足りない部分を補いながら、お互いに笑顔を見たいのです。それがあれば、孤独になりがちな超高齢社会を、だれもが乗り越えていけます。

私たちの倶楽部には札幌にいるフィリピン女性や北大の学生さんたちも支え手会員になってくれています。在日外国人も若者もやがては助けが必要になります。もっともっと会員の幅を広げ、社会の潤滑油となって心豊かな社会づくりをしていきたい。それが願いです。

今回の授賞式の懇談会や祝賀会の席で受賞者の皆さまの活動を知ることが出来ました。ハンセン病回復患者に寄り添い交流している方たち、お遍路さん小屋を58棟も作り上げたプロジェクト、最貧国のマラウイで学校給食支援をしているNPOなどを知り、胸が熱くなりました。汚れた川を30年にわたった清掃で清らかな川に再生させた静岡県のグラウンドワーク三島の皆さんには頭が下がります。より良い社会を目指して全国各地で活躍している仲間が大勢いることを知り、背中を押してもらい、これからの励みになりました。


▲コロナ禍でも助け合い作業を支援する事務局員

▲札幌市から福祉ボランティア奨励賞を受けました

▲コロナ禍に負けずにがんばっています

▲北海道からまちづくりコンクール表彰を受けました

▲車イスの会員を病院へ送り迎えしています

▲送迎サービス・ドライバーさん対象の安全講習会

NPO 法人 グラウンドワーク三島

専務理事・事務局長
渡辺　豊博

静岡県

1992年、ふるさとの環境悪化に問題意識をもった市内８つの市民団体が、「水の都・三島」の水辺自然環境の再生と復活を目指して結束し、グラウンドワーク三島実行委員会を発足。日本で初めて英国発祥の「グラウンドワーク」の手法を導入して市内を中心に70か所以上で環境再生、地域再生、農業再生などに取り組んでいる。1999年にNPO法人の認証を受け、現在では20の市民団体が連携している。グラウンドワークとは、1980年代に英国で始まった実践的な環境改善活動で、住民、行政、企業がパートナーシップを組み、グラウンド（生活の現場）に関するワーク（創造活動）を行うことにより、自然環境や地域社会を整備・改善していく活動である。企業と行政は資金、人材、土地などを支援し、住民側がボランティア活動による労力を提供することで、課題を解決していく仕組み。30年に及ぶ活動により、市内を流れる源兵衛川は本来の清らかな流れを取り戻し、農作物は豊かに育ち、結果、観光業や移住者が増え、シャッター街が消え、魅力ある街づくりの礎となった。

（推薦者：千賀　裕太郎）

多様な関係者を束ね、「水の都・三島」を再生

本会は、1992年から30年間にわたり、複雑に絡み合った困難な地域課題を解決すべく、バラバラに活動して、利害が対立する市民・NPO・行政・企業間の調整・仲介役となり、環境改善活動をリードし、相互にメリットが甘受できる共存共栄の新たな「地域協働」の仕組みづくりと、具体的な現場モデル・実践地を蓄積してきた。

この「課題解決力」のエンジンは、本会に参画する20の市民団体が一体化した「市民ネットワーク」の力であり、その多種多様な市民力・地域力を束ねる中間支援組織としての「コーディネート・マネジメント」の力である。

活動の成果は、ドブ川と化していた「源兵衛川」を、ホタルが乱舞し、子どもたちが水遊びに興ずる、安心・安全な水辺空間に創り上げた環境再生活動である。幅広い市民団体や行政、企業の力を束ねることにより、25年以上にわたる環境悪化の状況から川を蘇らせ、新たな水辺景観の再生に成功した。

また、静岡県の天然記念物である水中花・三島梅花藻を保護するための増殖基地である「三島梅花藻の里」を造成し、地域住民の地道な維持管理体制を構築して再生・復活させた。今では年間約20万人が訪れる三島を代表する「観光スポット」にもなっている。このように、現在までに三島市内に70か所において、市民力と現場力を結集した「三島磨き」を実践してきている。

さらなる発展的・創造的、社会貢献活動に挑戦

「水の都･三島」には、今後のまちづくりで活用できる、多様な地域資源･環境資源･文化歴史資源・景観資源などが埋もれており、その潜在力と発展性は無限といえる。

それらの資源・宝物を、専門家や企業のアイデアを集めた、多方面の活動により付

加価値を増幅させて、地域環境と生態環境とが調和・共存できる事業を実現化させていく。

2020年５月に実施された市民アンケートでは92％が「三島は住みやすい」と答え、満足度は前回４位だった「公園・水辺空間の整備」が２位に浮上した。密にならない疎の水辺自然環境の優位性が居住環境の価値として評価されたものだと考えている。

今回の受賞は、ふるさとを愛する多くの人々による、長い間の草の根による市民運動の成果といえる。受賞を継続性の強い励みと原動力に活用しながら「議論よりアクション」の信念のもと、幸せで美しい生活環境を創り上げていく覚悟である。

▲ドブ川と化した源兵衛川

▲清流がよみがえった源兵衛川

▲源兵衛川のホタルの乱舞

▲竹林伐採後の松毛川河畔林

▲地域協働による松毛川の竹林伐採

▲絶滅危惧種・ミシマバイカモを復活

▲境川・清住緑地の湧水の水柱

認定 NPO 法人 シェア＝国際保健協力市民の会

共同代表
仲佐　保

東京都

健康で平和な世界を全ての人とわかちあう（シェア）ために、行動を起こした医師、看護師、学生などが中心となり、1983年に結成された国際保健 NGO。全ての人が心身ともに健康に暮らせる社会を目指し“いのちを守る人を育てる”保健医療支援活動をカンボジア、東ティモール、日本で行う。カンボジアでの母子保健事業は30年以上に及び、2017年からはプレアビヒア州で現地の保健ボランティアや女性子ども委員会などと連携し「子どもの栄養改善1000日アプローチプロジェクト」を実施。２歳未満児の栄養状態の改善に取り組んでいる。東ティモールでは、ディリ県の僻地アタウロとメティナロに基礎的な医療機関にかかることも難しい妊婦や母子のために「住民参加によるプライマリヘルスケア強化事業」を実施。保健ボランティアの育成、ヘルスポスト（簡易診療所）の設置や「保健の船」と呼ばれる船舶を導入し、保健医療を促進させている。国内では、在日外国人母子を保健医療サービスにより多く繋げるよう、母子保健相談窓口を設置し、医療通訳者の活用を増進させると共に杉並区に多く在住するネパール人対象の母親学級を同区と協働で開催。外国人コミュニティで情報提供が進むよう女性普及員を育成している。いずれの事業も現地の人たちが主体となって取り組んでいけるように計画され、実施している。

（推薦者：公益財団法人 笹川保健財団　会長　喜多　悦子）

このたびは、歴史ある社会貢献者表彰を賜り、感謝しております。私たちは、1982年より活動を開始し、すべての人々が健康に暮らせる世界の実現を目指し、途上国のみならず、日本国内においても、困難な状況にある人々が自ら健康を改善することを支援して参りました。今回、多くの人々が、同じ思いをもとに、様々な活動していることに勇気をづけられ、今後も私たちの活動を継続していく思いを新たにしました。

現在の世界の置かれている状況は、特別なものです。新型コロナ感染症は、世界中のみならず日本でも猛威をふるっており、犠牲者の多さだけではなく、経済的にも世界の市民、住民に大きな影響を与えています。当初の予想を超え、オミクロン株のために、中々収まる傾向を見せません。また、ロシアのウクライナとの戦争も終わりそうもありません。アメリカ合衆国を中心とする NATO との経済的争い、確執の中、ロシア側にもそれなりに理由はあるのはわかりますが、人道的には、許されることではありません。

シェアの設立の一つの要因となった1979年のカンボジア難民のことを思い出します。世界的に社会主義国家が生まれた中で、カンボジアで生まれた原始共産主義地域は特別なものでした。笑うことを許されない人々、ポルポト政権下の中、何も知らない少年兵を使い、知識層を中心に100万―200万の人が虐殺されたと言われています。このため、あの人懐っこいカンボジアの人々の「微笑は失われた」30年でした。今、ウクライナで起こっていることは、カンボジアで起きたことの再現と言えると思います。戦争が起きている場所では、人権は無視されます。保健協力もしようがありませ

ん。シェアが実施している「身に寄り添う」協力も不可能です。戦争が今すぐに終わることを願っています。

現在、東ティモール、カンボジアでは、コロナの流行が収まっていますが、コロナのために医療施設でのサービスが停滞をしています。国内の在日外国人母子の置かれた状況も、経済状態も含め、悪化している状況です。今回の受賞を励みに、今後も日本国内外の厳しい状況にある人々への支援を継続していきたいと思います。

▲2000人が暮らす無医村に、ヘルスポストが完成しました！（東ティモール事業）

▲アタウロ島の保健を支える「保健の船」（東ティモール事業）

▲カンボジアの子どもの健康状態を見ている本田徹共同代表（2012年）

▲カンボジアの村での離乳食教室（カンボジア事業）

▲乳幼児健診時に保健教育を行う保健ボランティアさん（中央奥）（カンボジア事業）

▲女性普及員の母子家訪問（在日外国人支援事業）

▲沐浴講習会に参加してくれたお母さんたちに、助産師が医療通訳と共に沐浴方法を教えている様子（在日外国人支援事業）

大分県フィリピン友好協会

会　長
吉武　ロドラ

大分県

フィリピン出身の吉武ロドラさんが1995年に設立し代表を務める大分県在住のフィリピン人による交流団体。現在の会員は700名ほどで、設立のきっかけは阪神淡路大震災。被災者支援の為に農家に嫁いだ会員を始め、多くの会員や関係者の協力を得て大量の物資支援に成功した。日本国内では毎月のタガログ語無料相談室やチャリティーイベント、在大阪フィリピン領事館の協力の元、出張パスポート更新、東日本大震災被災地支援など精力的に活動。フィリピンでは恵まれない子どもたちへの物資寄付、台風・津波被災地域への物資支援。この８年間の継続事業として、大分工業専門高等学校の足踏みミシンボランティア部により修理されたミシンを貧困地域に送り、使い方や修理方法、縫製、販売のサポートを行い、貧困家庭の経済的自立支援を行っている。また、大分では急速に高齢化が進み介護者が不足している事、そして安定した職を探すフィリピン人会員も多い事から介護スクールの協力の元、継続的に無償の介護教室を実施。フィリピンでは日本で働きたい若者の為に無償の日本語教室を実施するなど、大分とフィリピンの架け橋となっている。吉武さんは母親の勧めもあり、フィリピンで日本語を専攻。卒業後日本企業に就職し1986年に来日。

（推薦者：大分工業高等専門学校　足踏みミシンボランティア部）

この度は大変栄誉ある賞を賜りまして、心からお礼申し上げます。

前日の懇親会では一緒に受賞された方々の素晴らしい活動を紹介され、外国人であるにも関わらず選ばれたこと、また錚々たる受賞者の方々の中で代表のスピーチを任せてくださったことを誇らしく思いました。また、帝国ホテルで家族ともども夢のような時間を過ごせた事は生涯忘れられない思い出となりました。安倍会長はじめ社会貢献支援財団の皆様、本当にありがとうございました。

1996年に当初在日フィリピン人の互助団体として始まった大分県フィリピン友好協会ですが、今年で27年目を迎えることが出来ました。今では県内のフィリピン人はもちろん、日本人の皆様や大使館・領事館の方々のお力で日本・フィリピンの両方で互助活動のみならず災害支援・貧困家庭の自立支援など、様々な活動を行えるようになりました。

中でも印象深いのは、大分工業高等専門学校足踏みミシンボランティア部の皆様と行った足踏みミシン寄付活動です。貧困家庭に一時的に物資を寄付するだけでは根本的な解決になりません。そこで電気代の要らない足踏みミシンを寄付し、元手となる糸と布、販路開拓のサポートをする事で経済的に自立できるよう支援するプロジェクトを始めました。寄付先は小学校にも通わせられないほど貧しい地域に絞っております。寄付から一年後に様子を見に行った際、軒先で待っていたあるお母さんに涙ぐみながら「子どもを小学校に通わせられるようになりました。本当にありがとうございます」と言われた事は今でも忘れられません。また、奇しくもコロナ禍のフィリピン

国内で失業者が後を絶たない中、足踏みミシンでマスクを制作・販売することで無事乗り切れたという報告を聞いた時は心からこの活動をして良かったと思いました。

立場や人種を超えて手を携える事で恵まれない人々はもちろん、私たち自身もより良い未来を拓けるという信念の元走ってきた27年間がこの度の受賞で報われたような思いです。これからも日本とフィリピンの架け橋となるべく邁進して参ります。

▲タガログ語無料相談

▲フィリピン大使館からの感謝状贈呈

▲友好協会チャリティーイベント

▲学校用品の寄付

▲靴や服の寄付活動

▲領事長の同時通訳

社会福祉法人 旭川いのちの電話

理事長
相澤　裕二

北海道

1980年旭川市に全国で11番目に開設した旭川いのちの電話。自殺予防などほぼ24時間体制で電話を受け、対話を通じて寄り添い、傾聴する活動を42年間継続している。電話を受ける相談員の業務は、中核市である旭川市の精神保健業務の一環とみなされ、旭川市が所管する庁舎を事務所として無償で提供されており、全国でも稀な協力体制で運営されている。相談員になるためには日本いのちの電話連盟の相談員養成講座を、規定を超える１年４か月以上受講し、さらに実地訓練を経て認定される。電話の相談事業はボランティアである相談員102名が行っていることで、現場の声を反映しやすい環境となっている。相談員のサポートを行うことも重要で、研修などを通じてストレスケアにも十分な配慮がされている。コロナ禍で相談員の活動も自粛せざるを得ない状況が続いたが、独居高齢者の相談が増加し、雇い止めや勤務時間の縮小などで40～50代のかけ手からの相談も増え、自死の数は増加傾向となっている。そのような状況下で、かけ手である相談者の言葉の背景にある本音を見つめながら、よき隣人として寄り添う努力を続けている。

（推薦者：社会福祉法人 北海道いのちの電話）

第58回社会貢献支援財団社会貢献者表彰によせて

この度、公益財団法人社会貢献支援財団から社会貢献者表彰を賜り、深く感謝申し上げます。1980年12月１日から続いている市民活動としての旭川いのちの電話が、ボランティアによる相談員の43年にわたる地道な電話相談活動を継続できたのも、北海道、旭川市、上川町村会や各団体・個人の後援会のご支援や新聞広告に協賛していただいた企業や医療機関、寺社や法律事務所の皆様のおかげと感謝しております。

また、日本いのちの電話連盟では北海道ブロック会議で常にご支援して下さる北海道いのちの電話の理事長や事務局長、研修委員長にもお世話になり、今回はご推薦も頂きました。

旭川は1970年代に日本で一番自殺が多かったところです。自殺予防を願った開局記念講演では日本「いのちの電話」の生みの親であるルツ・ヘットカンプ先生が語った「神に愛されないで、この世にいる人は一人もいない」という言葉が残されています。

開局20周年となる2000年の記念公開講座では「最近の子どもの精神病理」について、社会化の達成としての父親の役割の重要性を語っていただき、毎年12～13の継続研修グループが専門職や相談員リーダーと共に傾聴や心の病気について深めてきました。

2010年には開局30年、記念公開講座で渡辺和子氏より「生かされて生きる」と題して、ささえあいの環の中で、心を寄せ合って、人を生かす態度や言葉について深めました。

コロナ禍において、2020年度の当センターの総件数は10,575件、内自殺傾向は453件（4.3％）、2021年度は総件数10,833件、内自殺傾向は468件（4.3％）について一日平均29.7件の相談を約100名の相談員が、人生、思想･人権、職業、経済、家族、夫婦、

教育、対人、男女、身体、精神等に関する内容の相談電話を受けている状況です。

今年度、第44期となる電話相談員養成講座には約20名近い受講者が応募され、地域社会への貢献や自殺予防いのちの電話の活動の価値が再度見直されてきているように思います。第１期の受講者が現役で相談員を継続されていることも皆の励みになっています。

電話を通して、言葉にならないことば、沈黙や誰にも言えない思いを語り、聞かせて頂く場として今後も北海道内外の多くの皆様のご支援やご協力をいただきながら、つながりを広げて活動を進めて参りたいと考えております。

▲2021年11月27日　第42期養成講座認定式ときわ市民ホール

▲2022年９月11日　自殺予防学会　オンライン研修受講

▲第46回いのちの電話シンポジウムチラシ

▲2022年６月25日　第44期養成講座市民公開講座　講師吉田浩二 Dh.「自殺といのち」

NPO 法人 日本こども支援協会

代表理事
岩朝　しのぶ

大阪府

2010年に岩朝しのぶさんが発足させた里親制度の普及啓発活動を行う団体。虐待等で保護者と暮らせなくなった子どもたちは、日本に約４万５千人いる。そのうちの８割が児童養護施設などで育てる施設養育となる。一方、家庭的な環境で子どもを育てる制度には、養育里親、特別養子縁組などがある。里親の経験を持つ岩朝さんは、厳しい環境にある子どもを早い段階で適切な環境に置いて、その子どもが親になったとき、次の世代に貧困や虐待を持ち越さないために、里親制度が有効であると実感し、もっと広めたいとの思いから、里親の必要性と里親の不足から委託できる子どもが限られている実情を改善するべく普及啓発の活動を行っている。2016年からは、毎年10月４日の「里親の日」に普及啓発の全国一斉キャンペーン「One Love」を開催。里親が必要な子どもの数と同じ４万５千枚のハート形カードを作成し配布する。コロナ禍ではデジタルキャンペーンとしてSNS上で展開した後、すぐに何十万と拡散された。今後は両方でキャンペーンを行う予定。普及啓発を中心に活動してきたが、コロナ禍で里親の地域交流がなくなり、課題を抱えた子どもを養育している里親のギブアップが増加。対策として２年前からオンラインサロンを毎週土曜日に開催している。多いときは全国で35人程が参加し、里親の安心感に繋がっている。

（推薦者：NPO 法人 日本こども支援協会）

この度は大変光栄な賞をいただきまして、そして最大級の労いとおもてなしをありがとうございました。2010年から活動を始め、12年の間、ここまで労われた事もご厚意をいただいたことも無かったので、大きなご褒美に感激しております。

何とかして子ども達の人生、そしてその次の世代の人生も守ってあげたい、支えてあげたいという思いだけで12年間走り続けてきて、その思いを貫きたいがためにお金も時間も使ってきました。そんな私たちに「賞金はご自身の為に使ってください」と仰っていただき、その言葉にハッとしました。そして、普段は活動で里親さん達に「里親さんも時々は休んで楽しんでください」と伝えている私達が、自分を大切にしていかなければならないと思いました。エンパワメントの大切さを改めて感じました。この表彰で、とても大切な事に気が付くことが出来ました。ありがとうございました。

虐待や育児放棄、服役や精神疾患、経済的など様々な理由で親と離れて暮らす子ども達は全国に42,000人います。ほとんどの子ども達は愛着形成が出来ておらず、まだ人生が始まったばかりだというのに、既に生き辛さを抱えている子も多くいます。

児童虐待事件があると「親に厳罰を」と非難する方がいます。かつての私もそうでした。なんてひどい事をするのだろう！親も同じようにしてやればいい！なんて事を思う事もありました。しかし、活動を深めていくにつれ、それは浅はかで意味が無い事を知ります。

親に同じ事を！だなんて……かつては“されてきた側の子どもだった”親が多いのです。そこに厳罰を科しても、意味が無いのです。きっと必要なのは人の温かさ、愛

情や親切なのです。

私たち日本こども支援協会は里親制度の普及啓発と里親支援に注力しておりますが、一番願うのは「里親が必要とされない社会」です。

子どもが愛され、大切にされて心豊かに幼少期を育んでくれば、生きているのが辛い、死にたい死にたいと生きていく事も無いでしょう。親になった時に、我が子に折檻する事も無くなるでしょう。愛着をしっかりと形成し、何かメンタルに強いストレスがかかっても、弾力性のある心で跳ね返し、精一杯生き抜くことが出来るでしょう。

50年後の日本は里親が必要とされないよう、全力で頑張って参ります。

この度は私たちに活力を注入くださりありがとうございました！

▲2022　ONELOVE チラシ

▲10月４日里親の日　全国一斉里親制度啓発キャンペーン高島屋前

▲オンライン里親会設立

▲全国一斉里親制度啓発キャンペーン豊島区

▲大阪を変える100人会議世話人として登壇

▲虐待死ゼロライブ

NPO 法人 聖母

理事長
山田　真人

東京都

アフリカの東に位置するマラウイの子どもたちの学校給食支援を主な事業とするNPO法人。マラウイは世界最貧国の一つで、子どもの死亡率が高い国の一つでもあり、死亡の半数は栄養失調が原因。2015年に発生した大洪水が状況を悪化させたことで、イギリスの通信会社モベルコミュニケーションズの協力の下、現地パートナーを通じて同国南部のブランタイアの保育園と幼稚園の学校給食支援を開始した。支援を継続するため、2016年にはNPO法人の認証を受けて日本には「せいぼじゃぱん」を、マラウイには「せいぼマラウイ」を置き、北部の12か所の小学校と南部38か所の幼稚園で給食支援を行っている。せいぼじゃぱんが寄付の募集やマラウイコーヒーの寄付型販売で資金調達を行い、その100％をせいぼマラウイに送り、栄養士をはじめとする7人のフルタイムスタッフが400人以上のボランティアと共に給食づくりと提供を行う。新型コロナウイルスの流行で学校が閉鎖され給食提供が出来なくなったため、給食を支援パックにして配布し、支援を継続。今年は学校給食を再会する予定。またモベルコミュニケーションズが行っているオンライン留学コースに日本の学生を紹介、マラウイをはじめ国際課題やソーシャルビジネスについて学ぶ機会を提供し、プロジェクトを考え実行するといった啓発活動も行っている。

（推薦者：梶　文太郎）

この度は、名誉ある賞を頂き誠にありがとうございます。この賞を通して、日本において国際支援の姿の一部を広めるためのお役に立てれば光栄です。

弊団体のミッションは、学校給食を通して、世界中の子どもたちを飢餓から救うことです。それに伴い、私たちが日本で活動する上で、活動に関わる皆様と繋がり、どんな社会貢献活動を浸透させるべきか模索するのも、重要な役割と感じています。そんな中こうした賞を頂くことで、今までの活動に対するご評価を頂くことができ、とても感謝しております。

弊団体は、2015年よりマラウイで給食支援を実施しています。現地では7人のスタッフとボランティアが給食提供を行い、日本はその活動の支援をしています。学校給食を通して、子どもたちの栄養だけではなく、教育を支え、彼らの未来を変えていくことは、私たちの未来にも変化を与えることにつながります。

私たちは日本の学校、企業様とともに、国際化する世界の中で、実りのある社会貢献を目指しています。その活動として、日本の通商会社の支援によるマラウイ産コーヒーの寄付型販売があります。多くの学校の皆様が、国際課題について学び、その具体的支援のために、販売パートナーとして活動や、ワークショップを通しての学びを実施しています。

また、支援企業の英国の社会的企業Mobellは、日本の学生向けのソーシャルビジネスのインターンシップを実施し、自社で支援している給食支援活動を始め、多くのチャリティ活動について紹介し、学生が学ぶ場所を、オンラインで提供しています。

マラウイの学校給食支援は、日本にとって単なる遠い国への支援活動に留まっていません。現在の私たちの活動は、教育を通して日本の子どもたちにもつなげ、さらに今後の社会貢献の姿を変えていける可能性があると考えています。これからも、日本の皆様と活動を広げることで、社会貢献の輪を広げて参ります。私たちは、常に活動のパートナーとなってくださる学校、企業様を募集しております。機会がございましたら、是非ご連絡を頂けましたら幸いです。

▲オンラインコースのマラウイ人講師

▲コロナ禍で給食を受け取る子どもたち

▲保育士のトレーニング

▲寄付型コーヒーの商品

▲活動の紹介講演の様子

▲現地の学校給食支援スタッフ

▲給食提供とボランティアスタッフ

NPO 法人 DAREDEMO HERO

理事長
内山　順子

フィリピン共和国

2013年に設立され、フィリピンの最貧困地区の社会問題の根本解決に取り組んでいる。問題の解決にはその地域で育ったリーダーたちが各方面で力を発揮し、自分たちの力で環境を変えていく必要があるとして、教育支援を一番の柱に掲げ、貧困地区から奨学生を選抜し、大学卒業までの徹底した援助を行っている。現在51名余の奨学生がおり、あと２年で最初の卒業生が輩出される。また、団体の主な活動地域である、イナヤワン地区及びソオン地区のゴミ山、カレタ墓地、山岳農村地区であるタップタップで、自然災害や天災、疫病により「その日を生き抜くこと」すら困難な状況の最貧困層に対し、食事や必要な物資を提供。さらに自力で生き抜くための力や正しい選択をする力をつけさせ、「学ぶ喜び」を提供するために、ラーニングセンターを運営し、現在75名を超える子どもたちが学んでいる。提携する役場に無料のコンピューターHUBを設置し、より多くの子どもたちに学ぶ機会を提供している。日比文化交流も行い、双方の若者たちが共にSDGsの学びを深めるためのプログラムも実施している。

（推薦者：早川　穂乃花）

「すべての子どもたちが夢と希望を持ち　努力が正当に報われる社会を実現する」という目標を掲げ、これまで８年間、フィリピンセブ島で貧困層の子どもたちに教育支援を続けてきました。今回、このような形で、自分自身の努力が報われたことは、大きな喜びと共に今後の励みにもなりました。

日本を離れ、文化も風土も言語も違うフィリピンで活動を続けることは、簡単なことではありません。特にここ３年間は、新型コロナウイルス感染症による厳しい規制や、2021年12月にセブ島を襲った歴史的スーパー台風など、試練の連続でした。それでも、厳しい環境の中で夢に向かって頑張る子どもたちがいて、その子どもたちを支えてくださるご支援者様がいてくれたからこそ、活動を続けることができました。

コロナ前は、１年に１度は日本に帰国することができていましたが、コロナ禍では現地での支援活動に集中するため、なかなか日本に帰国することができませんでした。その中で、今回の受賞があり、表彰式にご招待いただくことで、３年ぶりの帰国が叶いました。

NPOやNGOの世界はまだまだ横のつながりが薄く、まして異国の地で活動を続けていく中で、同じ志を持つ仲間に出会う機会がなかなかありませんでした。今回、表彰式会場で29組の仲間に出会い、それぞれの活動や想いを聞くことができ、未来に明るい希望を持つことができました。そして、同時に自分たちに託された使命を改めて認識することができました。

セブ島には、まだまだ勉強がしたくてもできない子どもたちがたくさんいます。その日、食べるご飯もなく、家族のために働く子どもたちがたくさんいます。世界中には、まだまだ努力が正当に報われず、未来への希望を持つことができない人々がいま

す。今回の受賞を励みに、これからも自分にできる活動を続けていくことで、より多くの子どもたちが、夢と希望を持てるように努めて参ります。

最後になりますが、改めまして大変栄誉ある社会貢献者表彰を賜りまして、誠にありがとうございます。受賞におきましては、当団体に関わって下さる全ての皆様のご協力、そして温かな励ましのお蔭と考えております。改めて深く感謝申し上げます。

▲2022年７月に、奨学生、ラーニングセンターの子どもたち、保護者総勢250人を集めて行ったファミリーデーの集合写真

▲２年半ぶりに行った対面の奨学生に対する日本語授業

▲ゴミ山に住む保護者に対する栄養改善事業の様子

▲ラーニングセンターで学ぶ子どもたち

▲支援地区のひとつである墓地に住む子どもたちとの一枚

▲支援地区のゴミ山でゴミを拾って家族を助ける子どもたち

▲支援地区の子どもたちに行った歯磨き教室

テキスト訳グループ「あいフレンド」

代　表
河野　宏範

福岡県

福岡市で活動するテキスト訳グループ。東日本大震災の際、視覚障がい者のために、災害情報をパソコンやスマートフォン、その他のデジタル機器を使って、文字情報を音声で読めるようにテキストデータ化して欲しいという要望が多く寄せられた。その後災害情報以外の分野でも広くテキスト訳のニーズが高まったことから、2012年に全国の音訳ボランティアネットワーク（音ボラ）において「テキスト化プロジェクト」が始まった。地方拠点作りの重要性から、全国に先駆けて福岡市でも講習会などを行い、2015年にボランティア有志によって発足した。視覚障がい者の暮らしを豊かにすることに大きく寄与している。スマートフォンやパソコンを利用する視覚障がい者が増加している昨今、テキスト訳のニーズは今後更に高まるものと予想され、その活動が期待されており、コロナ禍でもオンラインでの定例会やデータのやり取りで役割分担を行い、試行錯誤しながら、必要とする方のために活動を継続している。このテキスト訳は手作業による正確な文字データを作成することから、書籍等の点訳・音訳にも活用できるため、視覚障がい者へ多岐にわたる情報を届けることができるようになるなど、ボランティアグループの垣根を超えた連携・協力の取組みも生まれている。

（推薦者：社会福祉法人 福岡市社会福祉協議会）

この度は栄えある表彰を賜りましたことを会員一同大変うれしく思い、心より感謝申し上げます。

「あいフレンド」は視覚障がい者のために、印刷された文字をテキストデータに変換する「テキスト訳」という活動をしております。テキストデータにすると、今はパソコンやスマホで上手に読み上げてくれますので、目が不自由な方が簡単に音声で情報を得ることができます。

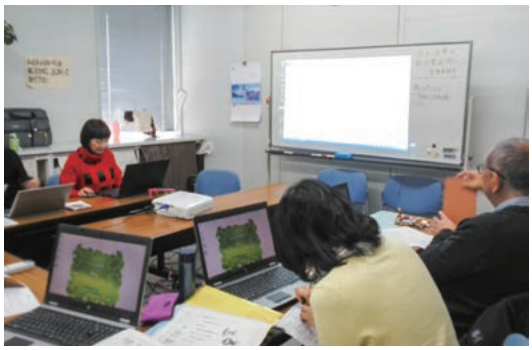
テキスト訳のほかに、視覚障がい者が情報を得るための方法として、点訳や音声訳が広く知られていますが、それぞれに特徴があり、適した使用法があります。テキスト訳は作業が速く、急を要する依頼に向いています。また、漢字を確かめたりアルファベットのスペルを確認することもできるため、学習にも適しています。

テキスト訳は点訳や音声訳より歴史が浅く、視覚障がい者にもまだまだ広くは認知されていません。しかし、これからはパソコンやスマホを使う視覚障がい者も増えてくると思われ、よりいっそう大事な情報取得手段となっていくことと思います。

最後に今まで手掛けきたテキスト訳作業を紹介します。視覚障がい者が仕事として講演会で使用する資料や、教師として学校で教えるための教材、学生が使う入試問題集や資格取得のための問題集など。また生活に必要な電気製品の取り扱い説明書、さらに趣味で習っている楽器の楽譜や各種団体の月間広報誌など多種多彩です。残念なことに、まだボランティアの人数が十分とは言えず、すべての依頼に応えることはできていません。

また、私たちが暮らす九州は地震や洪水、台風など各種の災害が多い地域でもありますが、災害時に必要な情報をテキスト化することで、災害時の障がい者支援が出来ないだろうかという思いもあります。

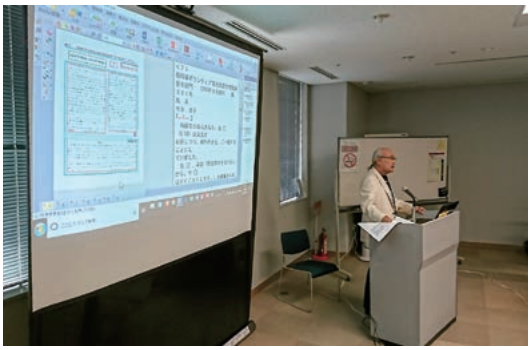
この受賞を機に広報活動やメンバーの養成にもいっそう力を入れ、いつか福岡だけではなく、九州全体にテキスト訳の拠点を広げていくことを目指し、会員一同、これからも励ましあいながら活動していきたいと思います。有難うございました。



▲2016年２月定例会　勉強会シーン

▲2017年12月24日　KBC ラジオチャリティーミュージックソン　募金活動

▲2018年１月８日「暮らしをかえる“め”の福祉機器展」グループ紹介コーナー



▲2018年９月22日　体験講座 - テキスト訳を学ぼう

▲2019年10月26日　テキスト訳 体験講習会

ガイドボランティアサークル「風車」

代　表
山下　健治

福岡県

昭和50年前後の街並みの変化に伴い視覚障がい者の外出が困難になり、福岡市ボランティアセンターで「外出支援ボランティア養成講座」が開催され、受講した修了生の中から、継続的な必要性を感じたメンバーが自発的に活動を開始したことをきっかけに、1981年３月ガイドボランティアサークル風車（かざぐるま）が誕生した。40年前の発足時は有志７名で活動をスタートしたが、会員は徐々に増え続け、現在は賛助会員も合わせると20～80代の約60名が所属し、年間400件以上の依頼に応えている。養成講座では、専門家によるボランティアや視覚障がいについての講義、実際に街を歩き地下鉄の乗降の仕方など、風車会員も同行指導を実施し、食事実習や利用者との交流などを３回にわけて学ぶ。会員は年間2,500円の会費の他500円の傷害保険に加入。ガイドの前日には移動場所を歩き、階段やトイレの場所等を確認する。毎月例会で活動報告を行い互いに学びを深めていることが功を奏し、40年間に１回も事故は起きていない。ガイドは通院や買い物などの日常の活動や旅行、登山、テニスや卓球のスポーツ介助など多岐にわたる。利用者の目となり、会話をしながら手引きをして同行するだけでなく、自立した歩行を目指している。理解を広めるための福祉体験広場や小中学校の出前講座でアイマスクの体験指導なども行っている。

（推薦者：社会福祉法人　福岡市社会福祉協議会）

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団からこの様な名誉ある賞をいただき、身に余る光栄に心から感謝申し上げます。受賞に当たり我々のこの活動にご理解、ご指導ご協力頂きました多くの関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。有難う御座います。

私たち「風車」の視覚障がい者（利用者）のガイド活動は1981年３月有志７名の方々により発足しました。それから40年間、夏の暑い日、また寒い冬の吹雪の舞う日、利用者のためにガイド活動を続けて来ました。

ある会員は、ご自身がガンでもう余命幾許もないと医師から告げられる中「**目の見えない方がお困りだから**」と利用者がバスに乗る時刻に合わせ、昇降のお手伝いを続けられていました。いつも「**目の見えない方の目になるのですよ**」と言っておられました。

また、ある太宰府の利用者は奥様の介護もあり、ご自身は思うように病院の治療も受けられず、失明の危機にみまわれ大変厳しい状況でした。ある時、太宰府社会福祉協議会から風車を紹介されました。その方は福岡の病院では治療ができない難病でした。最初は福岡から風車の手引きで高速バスを利用し山口大学病院に通院、その後広島大学病院に転院し月に１～２回、約６年間治療に通い続けられ、少しずつ近くの物が見えるようになり、大きな文字も書けるようになるまでに快復され、本人も大変喜んでおられました。

この事例のように今日の風車があるのは諸先輩の地道で献身的な努力の積み重ねと利用者との堅い絆によって築かれたものです。

会員は徐々に増え続け約60名となり、年間400件以上の依頼に応えています。会員は

専門家によるガイドの講習終了者で、ガイド活動は通院や買い物などの日常の活動、テニスや卓球等のスポーツ介助など多岐にわたります。

毎月の例会以外にも年に１、２回はフォローアップ講座を開催し、ガイド技術だけでなく、特に交通安全については互いに学び理解を深めています。お蔭様で40年間無事故を続けております。

また、社会福祉協議会の取り組みで福岡市内の小学校の出前講座も行っています。

さらに、周辺地域でボランティア活動のグループを立ち上げたいとの要請があれば、積極的に支援活動にも取り組んで参ります。

これからも風車の活動が利用者の皆様に喜んで頂き、少しでもお役に立ち安心して頂けますようにボランティアセンターと各関係機関の方々と共に、社会貢献に努め未来に向かって手を携えて参りたいと思います。誠に有難う御座いました。

▲2018年９月１日　ガイドボランティア養成講座　福岡市市民福祉プラザ

▲2011年11月13日　ガイドボランティアサークル風車30周年記念交流会

▲2011年５月３日　ガイドボランティアサークル風車30周年記念博多どんたく港まつり参加

▲2018年10月28日　秋のバスハイク（朝倉柿狩り）

▲2018年９月１日　ガイドボランティア養成講座　福岡市大濠公園

▲2022年７月２日　ガイドボランティア風車40周年

架け橋 長島・奈良を結ぶ会

会　長
稲葉　耕一

奈良県

創設者は岡山の長島にあるハンセン病療養所（「長島愛生園」「邑久光明園」）を尋ね、回復者やその家族の苦労を知った。その後落語家や音楽家を連れて慰問に通って交流するうち、“入所者の家族にも親戚にもなれないが、良き友人になりたい”との思いで1979年に交流会として発足した。ハンセン病患者やその家族の方々が受けた過酷な差別の歴史を繰り返さないために、啓発や教育活動に取り組んでいる。これまでの活動の中心は、美術展の開催で、回復者の中には俳句や絵の才能のある人が数多くいたため、その作品発表の場として1982年から年に一度美術展を開催するようになる。回復者の高齢化と新型コロナウイルスの影響もあり、2019年の第35回をもって美術展は終了した。その後2021年から「架け橋交流講演会」と名前を変えて退所者の講演会やセミナー＆分科会を、リモートを中心に開催している。その際、完成している作品があれば陳列して発表している。こうした活動で少しでもハンセン病そのものや回復者への偏見が無くなり、正しい理解が広まるようにと、地道な努力を続けている。

（推薦者：動物介在活動　ぷらす）

ハンセン病回復者との交流と正しい理解を

「ハンセン病って知ってるか」と県庁職員から聞かれ、知らぬので自ら学習し岡山県の瀬戸内海にある長島の二つの療養所（長島愛生園、邑久光明園）を訪ね、ハンセン病回復者とお友だちになろうと先輩たちが決意し、架け橋長島・奈良を結ぶ会を1979年に発足させました。

はじめ、楽しい落語や音楽で交流しようと努力するのですがなかなか心の距離が縮まらなかったようです。1982年から入所者（回復者）の園内で作ってる手芸や陶芸、絵画や書道などを奈良県で公開して「架け橋美術展」を始めました。しかし奈良県出身の入所者が「ここに居るのがわかるからやめて」と抵抗を受けました。心の架け橋を築くのはなかなか大変でした。国による隔離政策、家族への差別がこういう状態をつくって来たのです。

ハンセン病問題の行政的解決を求め、市民団体として、自ら学習し、正しい理解を求めて啓発・学習活動もとても大切ですから、会としての県民への啓発にも力を入れてきました。美術展は７つの縁に拡がり、お友達は10の園に拡がりました。美術展も県内の多くの機関団体が後援をしてくれることになりました。しかし啓発も兼ねて35回続いた架け橋美術展も回復者の高齢化に伴い制作出品にも困難が生じ、コロナ禍を境目に、2021年から「架け橋交流講演会」を（県内団体と共催、後援で）やっています。回復者と県民との交流と啓発に重点をおきながらも、従来より出品数は減っていますが作品展・啓発企画展も交流講演会時にやっています。

退所者や家族との交流も拡がって来てます。これまたある意味では入所者よりも受ける差別は厳しいとも言えます。分散会にして交流をしやすい工夫もしています。

また奈良県出身者や、架け橋美術展で親しくして来た入所者の半生を聞き取り、冊子を編集したり、ハンセン病問題学習交流をしたりしています。

今回いただいた社会貢献者表彰に感謝し、それを有効に活用して、自分の過去を、家族の病気歴を語っても何の差別も受けない、人間の尊厳を大切に出来る社会創りにさらに努力していきたいと思います。

▲人間回復の橋（邑久長島大橋の完成を祝う34年前）

▲今も続く療養所訪問

▲初めての療養所訪問（43年前）

▲架け橋　長島・奈良を結ぶ会

▲架け橋美術展

▲架け橋美術展

▲療養所での落語会

グリーフサポートやまぐち

代　表
京井　和子

山口県

創設者の京井和子さんは、４歳の娘さんを交通事故で亡くした際、心の傷を癒すグリーフサポートに自身が助けられた事から、その言葉がまだ一般的でなかった当時に、グリーフサポートの重要性と有効性について、もっと多くの人に知って欲しいと2005年に前身となる会を設立した。当初は交通事故遺族への対応を主としていたが、自死、いじめ、離別、転居等様々なグリーフの相談が寄せられた事から、まずはどんな悩みにも耳を傾けたいと方針転換し、幅広くサポートを行う団体として体制を整え、2015年に再スタートした。必要に応じて、地元のボランティア団体が拠り所とする山口市市民活動センターさぽらんてを通じて、その人の悩みに寄り添える団体の紹介も行っている。また京井さんは、いち早く行政にグリーフサポートの重要性を訴え、法整備に尽力した。人々が抱える苦悩を、グリーサポートによって軽減したり、癒したり、生きていこうという気持ちになれるように様々な取り組みを行っている。

（推薦者：山口市市民活動センターさぽらんて）

この度は第58回社会貢献者表彰を受賞させて頂きましたこと、とても嬉しく誠にありがとうございます。

感謝と喜びの気持ちでいっぱいです。

表彰を受ける中、自助グループから現在の「グリーフサポートやまぐち」となるまでの、この22年間思いを共感し支えて下さった方々、そしてスタッフみんなの顔が浮かんでいました。

「グリーフサポートやまぐち」の活動は、私が当時４歳の娘を亡くした事がきっかけです。

当時は事件・事故の被害者等は失意の中、県内にどこにも相談場所がなく、それならば自分で立ち上げようと設立し、時間が経つにつれ、病気、自死、いじめなど様々な喪失を持たれている方々のお話しを聞かせていただき「グリーフ」という言葉を知り、現在の名称に変更しました。

大切な人だけではなく、大切な何かを失った喪失体験からくる悲しみや苦しさ、怒り、無気力感など、誰もが抱えるグリーフを持った大人や子どもたちが地域の中で、孤立せずにつどえる「安心、安全な人と場づくり」をしております。

「グリーフ」というのは、深い悲しみを意味し、大切な人との死別や離別、災害などで家や仕事などを失うなど、悲嘆にくれる人が、たどる心のプロセスです。

そのような方が10人いらっしゃれば、皆さん思いが違い10通りの思いや寄り添い方があります。

そして寄り添う時、私たちは沢山の方々とのつながりが必要となり、そのつながりはネットワークづくりになり、社会の中で「グリーフ」という言葉を通して、人の思いを想像し「お互い様じゃからね～」そんな声掛けが地域で広がっていくことを願い

活動をしております。

今回の授賞式にて、ご一緒させていただいた受賞団体の方々との交流は、とても刺激的で、これから私たちだけではなく全国にありますグリーフの団体とも、つながっていただければ、また「グリーフ」という言葉を知っていただければと思います。

この受賞を励みに、これからも出来ることを無理なく活動していく所存です。

▲大学での講座

▲子どものつどい

▲子どもの思い　手記作成

▲小学校でのこころの教室

▲養成講座

▲高校生による広報・啓発活動

NPO 法人 Trellis

代表理事
田中　夏生

石川県

2006年から語学講師育成の為、ベトナム及び東南アジアで日本語と英語の講師のインターンシップを行っている。2017年にはベトナム政府からINGO組織としての認可を受け、ダナン市のドンア大学との連携で、語学アシスタント講師を派遣し、観光産業が急速に発展する同市において、語学習得により就業の機会を広げている。ドンア大学では日本企業や自治体等と連携し、インターンを日本に送っている為、日本語検定の取得が重要となっている。また、教育の機会に恵まれない貧困層の小学生から大学生までを対象に語学レッスンを無償で行っている。看護学科を有するドンア大学は、介護人材を日本に派遣していて、派遣先との労働条件の交渉も大学自ら綿密に行うことで、派遣される人の日本での生活環境を整え、同団体が行う語学教育により、更に質の高い人材を送り出すことに成功している。東南アジアからの就労者に関しては、送り出す側、受入れる側、それぞれが社会問題化する中、同校と同団体の活動により、両国と両国民にとって良好な就労関係を築いている。

（推薦者：ドンア大学）

この小さな活動を細々と続けてきて５年。海外での活動はコロナ禍で大きな打撃を受け、主たる事業である語学講師インターンの現地派遣ができず、オンラインでの活動にシフトしてからもうすぐ３年になろうとしています。

今回、私たちの活動がこのような素晴らしい賞をいただけることとなり、多くの皆様のご協力の輪で成り立っているこの活動を評価していただけたこと、本当に嬉しく思っております。コロナ禍で活動が限定される中、燃料切れに近づいていた心のタンクに新しい燃料を注入していただけたようで、これからの活動を継続・発展させていく上で大きな力となりました。パートナーであるドンア大学からも、さらに一層日本語教育に力を入れ、ベトナムと日本の架け橋となる若者の育成に努めていきたいとのお言葉もいただいております。

私たちの活動のこれから、ですが２つの方向性で活動の目標を設定しています。まずは日本語教育支援事業の基盤を整えることです。2022年11月にコロナ禍後、初めて現地に渡航し、専門家を招聘したベトナム人日本語講師のスキルアップ研修、そしてドンア大学学生を対象にした日本語検定試験対策講座を実施いたしました。2023年度はこれらの事業をさらに発展させ、コロナ禍で来日が叶わなかった若手のベトナム人日本語講師の日本への招聘と、日本語講座補助教材の制作に新しく取り組みます。また児童養護施設で暮らす高校生たちへの本格的な講座を開講し、大学進学に備えた準備と資格所得を支援していく予定です。

そして２つ目。2023年２月末よりいよいよ現地へのインターン派遣が再開します。これまで海外に出ることが叶わなかった日本の若い世代にぜひベトナムに渡航してもらい、現地の同年代の若者と触れ合う中でその場でしか体験できない時間を過ごしてもらいたいと思います。日本において外国人と共に暮らす社会の構築は大きな課題を

抱えたまま歪な形になりつつあるように思います。互いを理解し、共に問題を解決し、言葉や文化、慣習の壁を打ち破って「人として」心温まる交流ができる社会の構築の一端を担える人材を育成していきます。

私たちのような小さな活動にスポットライトを当ててくださり、本当にありがとうございます。今回の受賞を励みに、さらにこの小さな活動を積み重ねることで大きな力を生み出し、より良い社会の創造に貢献できる団体へと成長していきたいと考えています。

▲Family4 での授業の様子
日本語は、ひらがな・カタカナ・漢字と文字の種類も多いです。まずはひらがな・カタカナで短い単語を読むことで、読むスキル、発音・イントネーションを定着させます。

▲ひらがな・カタカナの読みを単語と一緒に覚える様子
食べ物などの身近なものから、読みの練習と一緒に覚えます。

▲日本語インターンとして派遣された相原恭平さん
当団体での活動を経て現在は在留外国人の日本での生活を支援しています。

▲Family4 での活動の様子
Family4 は幼児から高校生までが生活します。授業がスムーズに実施できるように、年齢ごとに大きく 2 つに分けて実施します。
勉強以外にも日本の文化も紹介することで、より日本に興味を持ってもらいモチベーションをあげること、維持することも大切な活動です。

▲パートナー大学のドンア大学で日本語の集団授業を行う様子
ドンア大学では英語よりも日本語学習者の方が多く、ニーズも高いです。
大人数の授業では、教室内を循環しながら理解できていない学生がいないか注意しながら進めていきます。

▲日本語能力検定の勉強
3 級以上の合格をすることでインターンに行くことができるようになるので、4 級から 3 級へと対策を行っていきます。